

# 序

群馬県立世界遺産センター（「世界を変える生糸（いと）の力」研究所、略称セカイト）は、本県が世界に誇る世界遺産「富岡製糸場と絹産業遺産群」の魅力を広く紹介するガイドンス施設として、また、その価値や背景をより深く探究する調査研究機関として、令和2年6月に上州富岡駅前に開設し、おかげさまで昨年には、5周年という節目を迎えることができました。

これもひとえに、皆様からの温かいご支援とご協力の賜物であり、心より感謝申し上げます。

さてこのたび、群馬県立世界遺産センター紀要第5号を刊行する運びとなりました。職員・関係者一同、大きな喜びと誇りをもって皆様にご報告申し上げます。本号の発行にあたり、日頃よりご支援、ご協力を賜っている多くの関係者の皆様に、改めて深く御礼申し上げます。

本号では、まず令和6年6月に伊勢崎市民プラザホールで開催した講演会「近代産業の育成と渋沢栄一」の記録を収録しています。明治新政府が外国資本への依存や従属に陥ることなく、アジアで最初となる産業革命を成し遂げた背景には何があったのでしょうか。そこには金融制度の確立と民間企業の創設・育成がありました。具体的には銀行の創設や、株式会社の創設・育成などといえるでしょう。これらの確立に多大な貢献をしたのが「日本資本主義の父」とも称される渋沢栄一です。

7月に渋沢栄一が肖像として採用された新紙幣が発行されるのを前に、近代日本の経済的独立を守りつつ産業育成を進めるといふ難題に、先人たちがいかに果敢かつ慎重に取り組んだのかを、改めて考える機会となりました。

当日は、渋沢史料館顧問の井上潤氏より「渋沢栄一による近代日本経済社会の創出」と題した基調講演をいただき、続いて、TICCIH（国際産業遺産保存委員会）日本代表の松浦利隆氏より「改良座繰製糸の発展—上毛繭糸改良会社の理想と現実—」と題する講演をいただきました。さらに、当センターの前名誉顧問であり、東京大学名誉教授の石井寛治氏からは、「売込商体制下の器械製糸—製糸金融による選別と拡大—」と題し、当時の製糸金融を中心とした講演をいただいています。

続いて、同年9月に藤岡市みかほみらい館で開催した講演会「生糸（いと）をひいた女たち」の記録を収録しています。本講演会では、日本の近代化を支えた養蚕・製糸業に従事した女性たちに焦点を当て、製糸工場で働いた女性と、自宅で生糸をひいた女性との比較などを通じて、絹産業を支えた女性たちの働き方とその実像に迫ることを目的としました。

日本女子大学文学部史学科教授の差波亜紀子氏に講演いただいた「器械製糸場における教婦と女工教育—富岡製糸場を中心に—」は、諸事情により本紀要への掲載が叶いませんでしたが、前出の6月の講演会にもご登壇いただいた松浦利隆氏による講演「座繰製糸と女性—どうやってどのくらい稼いだか—」について収録しています。

このほか、当センター研究員による研究論文として、佐藤有「内務省の生糸直輸出政策と実態について—海外市況調査と市場開拓—」を掲載しています。本論文は、明治初頭に内務省が推進した生糸直輸出政策を検証し、特に群馬県令であった河瀬秀治や群馬県の製糸事業

者の実際の動きからその効果と影響について考察するものです。

以上が『紀要』第5号における、当センターの主な研究活動の成果です。

本号の刊行にあたり、講演会、研究会にご参加いただいた多くの皆様をはじめ、関係するすべての方々に深く感謝申し上げます。

今後も当センターにおける、世界遺産「富岡製糸場と絹産業遺産群」に関する研究、さらには日本の蚕糸業・絹文化に関する総合的な調査研究が、さらなる深化への基礎となることを願っております。その実現のため、より多くの皆様に調査研究や教育普及活動へ積極的にご参加いただけますよう、引き続きご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

群馬県立世界遺産センター  
所長 松田 宗久